

2019（令和元）年度 学芸員等在外派遣研修実施報告書

名古屋市博物館
藤井 康隆

2019（令和元）年度学芸員等在外派遣研修の実施結果について、下記のとおり報告します。

- 1 研修テーマ 地域の文化遺産を活用した博物館のあり方に関する調査研究
- 2 研修期間 2019（令和元）年 11 月 25 日 ～ 2020（令和2）年 2 月 6 日

3 研修概要

（1）研修先の名称

派遣受入先：南京大学文化與自然遺産研究所

研修：南京博物院、南京市博物館、湖北省博物館

（2）研修の内容

3. 観光振興にも資するような多言語対応や情報発信，夜間開館，地域資源を活用した博物館の魅力向上の取組

12. その他，我が国の博物館政策の参考となる海外の博物館政策や動向，実践活動・研究事例について

博物館展示、文化遺産群からの総合的な歴史文化の構築と表現方法、大学と博物館の連携、博物館ネットワーク連携などについての調査研究。

（3）研修の成果

■研修・調査の計画と実施

研修先である南京大学文化與自然遺産研究所と相談した渡航当初の計画では、まず研修期間前半は南京市を中心とする長江中下流地域の主要な博物館を見学および訪問して、展示や所蔵資料、文化遺産などについて調査し、現地の博物館事情について具体的

に把握する。それらを踏まえて研修期間後半、おおむね中国の春節休暇が明ける2月上旬頃から、同研究所の調査研究や事業について研修をする計画とした。主な研修・調査先は、受入機関である南京大学文化與自然遺産研究所のほか、南京博物院、南京市博物館、湖北省博物館、鄂州市博物館である。

しかし、2020年1月中旬に突如発生した新型コロナウイルス疫禍により、1月24日以降は一切の博物館が閉館、大学も休学となったため、調査研究をおこなうことが不可能となった。南京大学の受入担当教員や各館研究員との連絡、ニュース等で情報収集に努めたが、情勢は悪化する一方となり、文化庁および名古屋市教育委員会より私に帰国命令が発せられ、予定よりも約2週間早く帰国せざるを得なくなった。そのため、南京大学文化與自然遺産研究所の調査研究に関する研修の大半は実施できなかった。

■ 研修・調査先の概要

《南京大学文化與自然遺産研究所》

南京大学文化與自然遺産研究所は、物質文化遺産、非物質文化遺産（無形文化遺産）、自然遺産、文化景観、博物館、歴史文化名城名鎮名村および街区について、調査研究、保護・活用、計画設計、出版を総合的におこなう専門的的文化学術機関である。

基礎研究部、博物館部、考古部、編集部、規画部、文物修復部、弁公室などの部門があり、文化遺産学、考古学、博物館学、歴史学、法学、建築学、都市計画、芸術、自然遺産などの幅広い専門分野の研究スタッフを揃え、総勢50名あまりのスタッフが在籍する。国や地方政府からの委託による研究課題・計画設計・調査などをおこない、学術書や学術誌、一般向け普及刊行物を発行するなど、多くの実績を有する中国でも有数の文化遺産専門研究拠点である。「江蘇歴史文化研究基地」、「南京大学南京歴史文化研究中心」といった文化遺産の保護活用研究拠点をそれぞれ江蘇省、南京市と共同で設置するほか、「金箔鍛制技芸保護與資源開発研究基地」のような南京の伝統工芸を保護・研究し文化資源として活用する組織を設けるなど、南京および江蘇省の歴史文化まちづくりを牽引している。



南京大学文化與自然遺産研究所



同研究所 博物館部・基礎研究部

《南京博物院》

中華民国期の国立中央博物館であり、中華人民共和国成立後の1950年に南京博物院と改称し、1954年から江蘇省の省立博物館となって現在に至っている。2009年からリニューアルおよび増築をおこない、2013年に全面オープンした。現在は総建築面積84,800 m²、展示室面積26,000 m²で、歴史館、芸術館、特展館、民国館、数字館（デジタル館）、非遺館（非物質文化遺産館）の6館で構成される。所蔵品は2018年現在で432,768件に達し、そのうち珍貴文物（国家一級文物から国家三級文物まで、つまり国宝・重要文化財級の文物）は371032件である。旧石器時代から近現代まで、考古資料、書画、陶磁器、仏教美術、北京故宮（紫禁城）の明清宮廷文物などにわたる中国における最高級の文化財を所蔵する。



南京博物院全景

内部組織は江蘇省考古研究所、江蘇省文物保護研究所、陳列芸術研究所、社会服務部、典藏部、江蘇省非物質文化遺産保護研究所、古建築研究所、古代芸術研究所、文物徵集部、図書情報部、文化創意部、『東南文化』編集部、弁公室（党群科、文化交流中心）、人事組織部、計画財務部、学術委員会秘書処、安全保衛部、後勤保障部等部門があり、さらに国家文物進出境審核江蘇管理处が附設されている。現在、正規職員と外部職員を合わせて約720人の職員が勤務している。

南京博物院は1930年代には中国の博物館学の基礎となった『博物館学』（曾昭燏・李濟著）を出版するなど、早くから中国における博物館学を牽引してきた。現在でも博物館学研究が盛んであり、多くの学術会議が開催され、また同館が発行する定期刊行学術雑誌『東南文化』にも博物館学に関する多くの研究成果が発表されている。国際的な学術交流、展覧会交流も非常に多く、中国における博物館や文化遺産の研究の国際的拠点である。

2008年から入館料を無料化している。館内では案内・問い合わせ、荷物預かり、ベビー

カー・傘の貸出、音声ガイド機器貸出、定時解説、wi-fi、喫茶・食事、グッズ販売などのサービスをおこなう。特展館には児童体験室があり、子供向けのさまざまな体験事業を開催している。非遺館では、金陵剪紙、揚州木版印刷、宜興紫砂陶器、秦淮灯彩、南京金箔などの無形文化遺産の技術伝承者を招いて定期的に実演を開催する。さらに劇場茶館では、木偶劇、雑技、南京白局、蘇州評彈、崑曲などの江蘇省内各地の伝統芸能の公演を定期・定時で開催する。これらの活動を通じて無形文化遺産の保護振興と魅力発信に取り組んでいる。



児童体験室



ミュージアムショップ (特展館)



非遺館



非遺館で実際に制作する宜興紫砂陶器



劇場茶館での伝統芸能公演のようす



伝統芸能「南京白局」

《南京市博物館》

南京市博物館は南京市立の歴史芸術系総合博物館で、国家重点博物館の一つに位置づけられている。中華人民共和国初期に設置された南京市文物保管委員会を前身とし、1978年に南京市博物館として成立した。2014年に上部組織として南京市博物総館が新たに設立され、その傘下に南京市立の文化遺産関係機関が組織統合する形となった。それにもなつて、従来南京市域の遺跡発掘調査および出土文物の保護管理をおこなってきた南京市博物館考古部は南京市考古研究所として昇格独立した。現在、南京市博物総館の傘下に、南京市博物館、太平天国歴史博物館および瞻園、梅園新村紀念館、南京市民俗博物館および甘熙宅第、渡江勝利紀念館、江寧織造博物館、六朝博物館、南京市考古研究所、南京市文化遺産保護研究所の9つの機関が所属している。

南京市博物館は明朝洪武17年（1385）に太祖朱元璋の詔勅によって置かれた朝天宮を利用しており、敷地面積は約40,000㎡に及ぶ。現存する建築は清朝同治5年（1866）に再建されたものである。江南地方に現存する古建築としては最も格が高く、面積も最大で、残存状態も最も良いものであるため、同館は文化遺産建築としても重要である。

南京市博物館の館蔵品は10万件あまりで、南京原人の頭骨や考古資料、陶磁器、金銀器、書画、近代史料にいたる南京の全史にわたる時代の資料から構成されている。

常設展は「龍蟠虎踞—南京城市史」、「玉堂佳器—館蔵精品展」、「雲裳簪影—宋明服飾展」から構成されている。

「龍蟠虎踞—南京城市史」は展示面積4,200㎡、六朝の古都、十朝の中心都市としての南京の通史を紹介する展示である。「山川形勝 宜居之地」、「六代相承 定鼎金陵」、「数代興亡 幾經沈浮」、「江山一統 南都繁会」、「共和肇始 近代新都」の五章構成で、とくに南京を代表する六朝、明代、中華民国の3つの時代に重点を置きながら、南京をめぐる歴史的脈絡を紹介することを主眼としている。考古資料、歴史・民俗資料、情景・風景の復元や建築模型などを用いて展示し、展示資料数は2,100件あまりである。



南京市博物館（朝天宮）外観



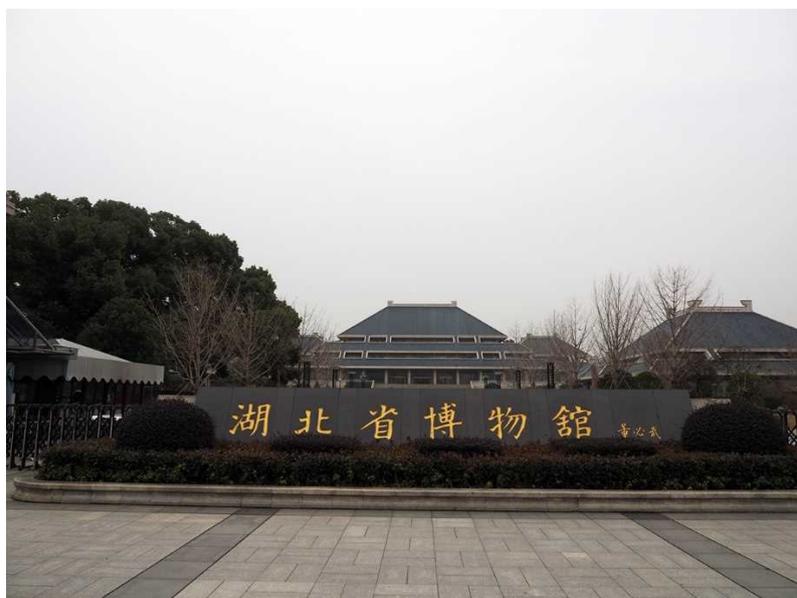
「龍蟠虎踞—南京城市史」展の一部

「玉堂佳器—館蔵精品展」は展示面積約 800 m²、国宝級文物「蕭何月下追韓信図梅瓶」をはじめとする館蔵資料約 30 件を展示する。この展示室は各時代に関する精選した館蔵資料を芸術的な観点から鑑賞することを目的にしており、個別の資料をじっくりと鑑賞する美術館風の展示手法となっている。展示室は江南地方の古建築様式を採用して、伝統建築の配置構成や内装、古典園林造営の特徴などを反映しており、展示室自体が当地方の歴史文化の特徴を体感・理解する補助的要素となっている。古建築の室内構成に従って、展示室内は複数の小規模な部屋に分割され、各部屋に青銅器、仏教文物、伝統工芸家具などのテーマを与えて少数厳選した館蔵資料を展示している。

「雲裳簪影—宋明服飾展」は展示面積約 300 m²で、館蔵品の宋・明代の皇族・貴族層の服飾の優品 100 件あまりを展示する。金銀細工工芸の装身具や絹織物の衣服・布・小物などで、いずれも南京市内の宋・明代の墓や遺跡からの出土品であるが、その残存状態の良さと高度な工芸技術に驚かされる。また、これらの資料は、絹織物生産、金細工・金箔工芸という南京を代表する伝統工芸の由緒を表すという意味でも、特徴的な展示である。

《湖北省博物館》

湖北省博物館は 1953 年に設立され、湖北省全体を代表する重要な文化財を収蔵・収集する、国家一级博物館である。湖北省文物考古研究所を併設しており、発掘調査を含む考古学的な調査および保護研究機能を備えている。敷地面積は約 123 ヘクタール、建築面積は 50,000 m²。



湖北省博物館の外観



湖北省博物館「曾侯乙展」の展示室内



「曾侯乙展」の目玉資料・編鍾

館蔵品は約 24 万件で、そのうち国家一級文物（国宝）は 1,000 件弱にのぼる。常設展には石家河文化展、曾侯乙展、楚文化展、梁荘王墓—鄭和時代的瑰宝展、九連墩紀事展、書写歴史展、秦漢漆器芸術展、土與火的芸術 古代瓷器專題展、鄖県人展、屈家嶺文化展、盤龍城展、荊楚百年英傑展があり、特別展・企画展を毎年 10 数件開催する。

2007 年 11 月から入館料を無料化、2011 年 12 月からは新館建設とリニューアルに向けて計画と建設工事を進めている。完成後は建築面積 110,000 m²、展示面積約 30,000 m²に達することになる。収蔵、展示、研究、技術保存、教育などの従来の同館の機能に加えて、図書閲覧、映像放映、グッズ購入と飲食、休暇行楽などの機能を備えるものにし、地域文化の特色と現代的反映を表現し、湖北省と武漢市における地域文化にあふれる文化と観光の拠点とする計画である。

■ 研修の成果と考察

南京博物院では、毎年約 30 件の展示企画を開催しており、その内容は「レベル A」とする特別展から「レベル C」とする企画展や中小規模のテーマ展示まで各種に分かれる。同館ではレベル A の特別展は冬季に 2 件、夏季に 2 件の開催と決められており、かつ夏季 2 件のうち 1 件は児童を主な対象とする展覧会であることを義務付けている。

同館には内部組織に展示の企画、什器製作、施工、運営人員が備わっているため、展示ケース・設備の調達や設置などはすべて内部でまかなっており、予算節減にも寄与している。年間の平均入館者数は 400 万人以上であるが、その 80%の来館者を 10 代～40 代の年齢層が占めていることは、日本の博物館の状況とは大きく異なる。



民国館の復元町並みのようす

る点である。その集客の要因は特定が難しいが、同館の研究者によれば、古蹟・文化景観が集中する文化観光都市としての南京において、同館自体が観光・旅行の主要な目的地の一つとして位置づけられていることが大きいという。現在の中国では公立博物館施設は常設展および敷地内施設を含め、原則上、入館料は無料だが、南京博物院ではレベル A の特別展のみ 20 元～100 元の観覧料を徴収している点が他館とは異なる。

館内では洗練されたシンプルな店内デザインの中国茶カフェ、民国館内に復元された中華民国期のレストランや喫茶店での軽食・喫茶などが設けられている。民国館では、民国期の風景の中で自由に写真を撮ることができるほか、郵政局との連携による



民国館復元町並みの「ジャズバー」



内部は実際にカフェとして営業



復元郵便局での実際の記念郵便業務



復元店舗で営業する書店

復元の郵便局で絵葉書や記念スタンプ・切手を利用しそこから発送できるサービスや、復元の商店に洗練された空間と品揃えで人気の書店を誘致するなど、さまざまなサービスが展開されている。

南京市博物館では入場料が有料で 25 元を徴収している。南京市博物館は大規模な広告・広報媒体に打ち出すだけの広報予算はなく、南京博物院ほどの高い集客力はないが、毎日どの時間帯も来館者が途絶える様子はない。以前は同館が所在する朝天宮の



朝天宮前庭で遊ぶ親子連れ



南京市博物館での小学生の校外学習

入場料として料金を徴収していたが、この朝天宮の前庭は市民の憩いの場として親しまれてきたことから、それを鑑みて朝天宮の前庭までは無料とし、敷地内の古建築が所在する博物館区域のみを有料とするよう変更された。また、この入場料を徴収する事情も、予算上の理由からではなく、朝天宮という古建築文化遺産の内部に博物館が所在するため、その維持管理の目的によるところが大きいという。単なる博物館ではなく、古蹟公園としても市民と都市のまちづくりに貢献している。

湖北省博物館は、その名の通り湖北省を代表する省立の大型博物館であるが、入場・入館料は完全無料である。博物館の運営予算は国からの資金に依拠している。常設展は湖北省を代表する歴史・文化に絞った複数のテーマ展示室を設けており、通史展としての展示室は存在しない。収蔵庫は広大で、広い通路のある収蔵スペース内部が、さらに収蔵品の種別ごとの施錠封鎖された収蔵庫に分かれている。庫内に木製の収蔵棚を設置しており、収蔵番号と遺跡・調査年などによってスムーズに取り出せるようになっているが、収蔵時期の古い資料などは整理やデータベース化が終了していないものがあり、現在整理を進行中である。

中国の主要博物館の常設展では、通史展の方式を採用する館も多いが、あえて通史展を採用せず、テーマ展や分野ごとの展示を複数設け、館全体を観覧することで結果的に通史的・地域的理解ができるという構成の館もある（湖北省博物館）。また、両者の方法を併用している館もある（南京博物院、南京市博物館）。また多くの博物館に共通することとして、ディスプレイ、展示室内サイン、壁面模型など、展示室全体が立体的に構成されている。展示そのものはケースごとに一定の意味やグループ、テーマなどの共通性をもたせて資料が陳列されている。展示室空間利用はスペースを大きくとるべきところには大きく割り、展示スペースごとの区切りや動線上の視角を開放したり遮ったり、随所に大型の復元模型などを設置するなどして、メリハリをつけることで、次に何が見られるのかという未知への期待感を持たせている。また、展示のテーマ性が見る側にとって明確にされている。解説パネルやイメージ写真、図解なども多く、最新の研究成果・

研究動向を紹介するなど、丁寧さが感じられる。

地域連携・博物館交流の面では、国内の他地方との交流展の開催が積極的に展開されており、館によっては交流展の年間開催数も義務付けられている場合がある。省内あるいは近隣地域間で考古学発掘調査や、その他の調査研究の成果を紹介する、博物館ネットワークでの企画展もみられる。さらに、省の違いを超える範囲の3館～5館ほどの大型博物館で予算を出し合い、1件の大規模特別展や海外展を企画し、巡回させるという方法も近年では主流になってきている。

また、実演や公演の定時開催、児童体験室、普及活動の充実、映像・デジタル機器の充実、ミュージアムショップ、室内デザイン・メニューともに洗練されたカフェ、休憩所としての簡易な喫茶室、授乳・オムツ替え室、周囲の景色や庭園などの伝統景観を楽しむ広場など、さまざまな目的での博物館利用ができる施設や機能が備えられていることも、近年の中国の主要博物館に共通する特徴である。

本研修を通して、中国における博物館の多様な事業展開、博物館ネットワークの連携、必要な施設・設備、予算的背景などについて実態と特徴を知ることができた。普及事業や展示計画には、教育や博物館間交流・地域間交流などの目的が明確に反映されている。たとえば1年間の特別展計画において、児童向け特別展が定例化して組み込まれている館や、定められた数の他館との交流展を開催することが規定されている館などがある。普及活動では学校教育への寄与を目的とする特別授業やワークショップだけでなく、館外見学ツアーや長期休暇中の数日間以上にわたる体験講習など、家庭教育からのニーズも念頭に置いている。これらの事業展開は特別展の内容や地域ないし国内を代表する文化遺産との明瞭な関連付けのなかでおこなわれており、早期教育や文化振興・観光に大きな役目を担っている。また、交流展や共同企画の特別展などでは、歴史や文化におけるさまざまな地域の特色、あるいは異なる地域間の共通点が他地方で紹介され、多くの注目を集めると同時に、これが観光の目的ともなっている。

博物館を、文化財資料を観覧・学習するための場と位置付ける前提にこだわるのではなく、基軸に豊かな文化遺産を据えつつ、施設・サービス・展示に多様な楽しみ方を展開することによって、博物館が活性化し、多くの文化遺産に対する関心や知識も深まっていた。このことは日本の博物館を振り返るときにも重要であると思われる。

(4) 研修成果の活用計画

本研修の成果は、現在基礎調査中の名古屋市博物館の再整備計画において、展示と館内空間の設計や展示企画・構成、博物館の機能構成などに活用する予定である。また、愛知県博物館協会など県内外の研修会や学会・講演、論文などにおける研修報告や、当館で毎年実施している博物館実習での講義などに活かしていきたいと考えている。研修先および得た知見が多岐にわたるため、目的や話題に合わせて、今回の成果を公表していきたい。

(5) その他

偶然に新型コロナウイルス疫禍に遭遇したことで、期せずして中国の博物館の危機管理と社会貢献の一部を垣間見ることができた。中国の博物館ではこのような局面においても、来館者規制や閉館措置などの対応を迅速に実施した。そのうえで常設展のみならず特別展や講演会、調査研究などに関しても、インターネットやデジタル技術を利用してきわめて迅速にサービス提供を開始した。自然災害のみならず、こうした疫病などの際にも博物館が社会に向けてできる貢献を、日本の博物館でも構築し、いつでも実現・提供できるようにしておく必要を痛切に感じた。